「街角から公衆電話が消えてゆく」

上山憲一郎（3組）

十月、台風の朝テレビのニュースでは、首都圏の概ねの電車は動いているとのことだった。病院の予約があったので電車に乗るべく駅に行った。電車は運転されておらず、今後の見通しも立たないとのことなので、病院に連絡を取るために公衆電話を捜した。

駅の二階の広場に四機あったなと思い勇んで行ったところ、ボックスだけが残り機械は撤去されていた。コーンコースにもあったはずだと思い見渡したが無くなっていた。歩道橋の下には、かなりの台数が有った筈なのだが全部だめだった。捜すこと十五分ぐらいで、やっと歩道上に使用できるものを見付けた。

公衆電話は携帯電話の普及につれ、採算維持が困難になり、使用頻度の低いものから逐次撤去されつつあることは認識していたが、此程までとは思わなかった。帝国ホテルや東京会館のロビーといった準公共の場でも無くなっている。

辞書によると“公衆電話とは、公衆の便利を考えて街頭などに設けられた電話”となっている。公衆電話には今まで随分お世話になってきた。今後もお世話になるだろう。

世の中には携帯電話を扱えない哀れな老人もいることを忘れないで、撤去をなるべくゆっくりとやって欲しいと願っている。一般家庭の固定電話もそのうち無くなっていくだろう。パソコン、スマホ、携帯電話などを使いこなせない情報音痴は、公衆電話が全部無くなったら緊急の連絡はどうすれば良いのだろう。

物品は時と共に変化し消えてゆくものだが、テープレコーダーが電気屋の店頭から消えてしまったことを御存知だろうか？　正確に言うと全く無くなった訳ではない。きわめて御粗末なものが細々と売られている（値段も安い）。小生の買ったものなど、その日のうちに壊れてしまった。メモリー媒体も変化するから、テープレコーダーが無くなっても当然ではないかと言われるであろうが、ディスク、ICメモリー等では、現在ではまだ頭出し機能が充分でないのである。

ある歌の途中の発音が良く聞き取れず、そこだけ何回も繰返し聞くことはよくあることだ。テープレコーダーなら簡単に繰返しができるが、後続の商品ではそれが出来ない。テープレコーダーが故障したが、新しいのが入手できないかとよく聞く。

今後はちゃんとしたテープレコーダーはもう売り出されないだろうから、今持っている物を大切に使うようにしましょう。

固定電話やテープレコーダーが無くなるのは仕方のないことと諦めるが、世の中に君臨してきた正統派？　あるいは本格派？　の食物（くいもの）が、だんだん無くなっていくようで誠に心配である。

アンパンは、日本の誇る菓子パンの中の王様であるが、今や正統派アンパンは変形改悪されたものに駆逐されつつある。スーパーではまだちゃんとしたアンパンが売られているが、コンビニにはほとんどない。従って小生はコンビニではなるべく買い物をしないようにしている。

カレーライスの定義は、“肉野菜をいためて煮込みカレーを交ぜて、飯にかけたもの”となっている。小生の勝手な解釈では、肉野菜（特にジャガイモ）は煮込んだ後でもちゃんと肉ジャガイモの形状の認められるものを正統派カレーライスと思っている。

だが、最近ではそういうものは少なくなってきた。ホテルオークラのものでも、松本楼のものでも、はたまた全国展開するチェーン店のものでも、ドロドロであって肉野菜の形は残っていない。

ホテル風スープとか、ホテル風カレーとか、パンとか持て囃されているようだが、これが影響しているのかも知れない。カレー通（と称している人）に言わせると、都内でまだ三軒、肉ジャガイモの形の残ったものを出す店があるとのことで、近々

連れて行ってもらうことにしている。（我が家のカレーライスも、いまだジャガイモ等は原型を留めている。）

ラーメンほど国民的人気のあるくい物はないのではなかろうか？　全国各地で御当地ラーメンがつくられている。それはそれで結構なことだが、昔懐かしいラーメンを見つけるのに苦労するようになった。

そのラーメンとは、“素朴な醤油味で、厚くもなく薄くもないチャーシューと共に支那竹、ノリ、鳴門、ホウレン草を程好く配置したもの”を言う。茹卵の切ったものは必要ない。新しいものにおされて大変だろうが、昔風ラーメン組合でもつくって頑張って欲しいものである。

和食がユネスコの無形文化財に登録されたそうだが、アンパン、ラーメンは和食に入るのだろうか。

夏になると“ぶっ欠き氷”を売る店があそこそこに登場した。今でも浅草と根津のどこかに行列のできる店があるそうだ。白熊みたいに豪華でなくとも、レモン、イチゴ程度の手軽な店がその辺に復活してくれないかと期待している。

今年の夏は暑かった。かといって氷屋が復活したという話はきかない。全国最高気温を更新し、一躍有名になった高知県四万十市の人々が、暑い暑いと言いながらも自慢げに四十一℃について話をしていた一方、記録を抜かれた熊谷の人々の一番を取られ残念そうにしていたのは興味深いことであった。

かって鹿児島は台風銀座であり、平均気温は全国一高いということで内心自慢していた。四万十や熊谷の人々の気持ちはなんとなくわかる。

高温、集中豪雨、高潮等の気候変動で生活基盤は脅威に晒されつつある。“百年に一度の事象”“今まで経験したことのない何々”が今から次々に起こるだろう。

気候高動阻止については、あらゆる手段が取られなければならないのだが、世界中の人々が生活が豊かになると信じて、二酸化炭素を多く排出せざるを得ないエネルギー多消費社会を選択している。

間も無く後期高齢者になる。良いことも悪いこともあった。肉体の衰えと共に物事はこうあらねばならぬという気概もなくなってきた。

思想信条に反するものには身をもって反対すべき、デモにも参加すべきということはわかっているのだが。

もう暫くは、アンパンも正統派ラーメンもあるだろう。それを楽しみにもう一寸生きることにしよう。

八期通信アーカイブス

2005年 第11号
佐賀　義彦（3組）

俺たちの組の授業には「赤鬼」「青鬼」が棲んでいた。数学だ「来たぞっ！」窓際の者の知らせで緊張が迫る。

「赤鬼」さんがムチで、自らに気合をいれながら小走りに迫る。「今日は、特に大山と益崎に活を入れてやろう」
などと考えながらか。
次は英語だ。今日「青鬼」さんの犠牲になるのはどこの列だろう。「うわぁぁ、俺たちの列だ。えーっと、俺は5人目、ここらがあたる」隣に尋ねながら、教科書に必死に訳を書き込む。すると「ばかやろぅ、おまえ予習したのか！」　ほっぺたの鳴る音が。「うわぁ、2人目の宮元がしくじった。行がずれたぁ。もうだめだぁ・・・」

休み時間、昼食休憩時間というと、級友は2、3人して、黒板に図形や数式を書いて、むずかしい議論をしている。か、仮眠している。隣の4組からは毎日、男女仲良くキャッキャと談笑が聞こえる。彼らは、青春・高校生活を謳歌しているようだった。大平、大石、浜崎、藤安（2組）らは「ダンディ」を競っているようにも見えた。3組の者にも青春の血はあった。が、殆どの者が内に鬱積していたのではないか。

我々の卒業アルバムを紐解かれたい。当時「勉強学者」で、試験の点数を高く獲得していた連中が、ことさら不良ぶった格好を写真にのこしているではないか。我々にも「遊び心」はあったのだと言わぬばかりに。

教員になって、免許は社会科を得たが、赴任してすぐ数学と英語を担当させられた。

高校時代、数学の成績は、２００点満点の試験で、常に１０点以下であった。英語も似たようなもの。それでも中学生に教授できた。高校時代、いやでも叩き込まれていたおかげだと思い知った。

教員３年目のある日、数学教師の研修会に、なんと、県の指導主事となった、小迫先生が指導者としてやってこられたのである。

身の置き場がない。みつからぬよう姿勢をかがめていたが、休憩時につかつかとよってこられた。「先生、私のようなものがこうして数学を･･･」
「よかとよ」
とたった一言であったが、表情には慈愛を浮かべておられたように見えた。

今でも級友は言う。「ザコさんは、言葉はぶっきらぼうだったが、温かい心遣いをされていた」と。